

145

說教
自在

一

口

辯



目次

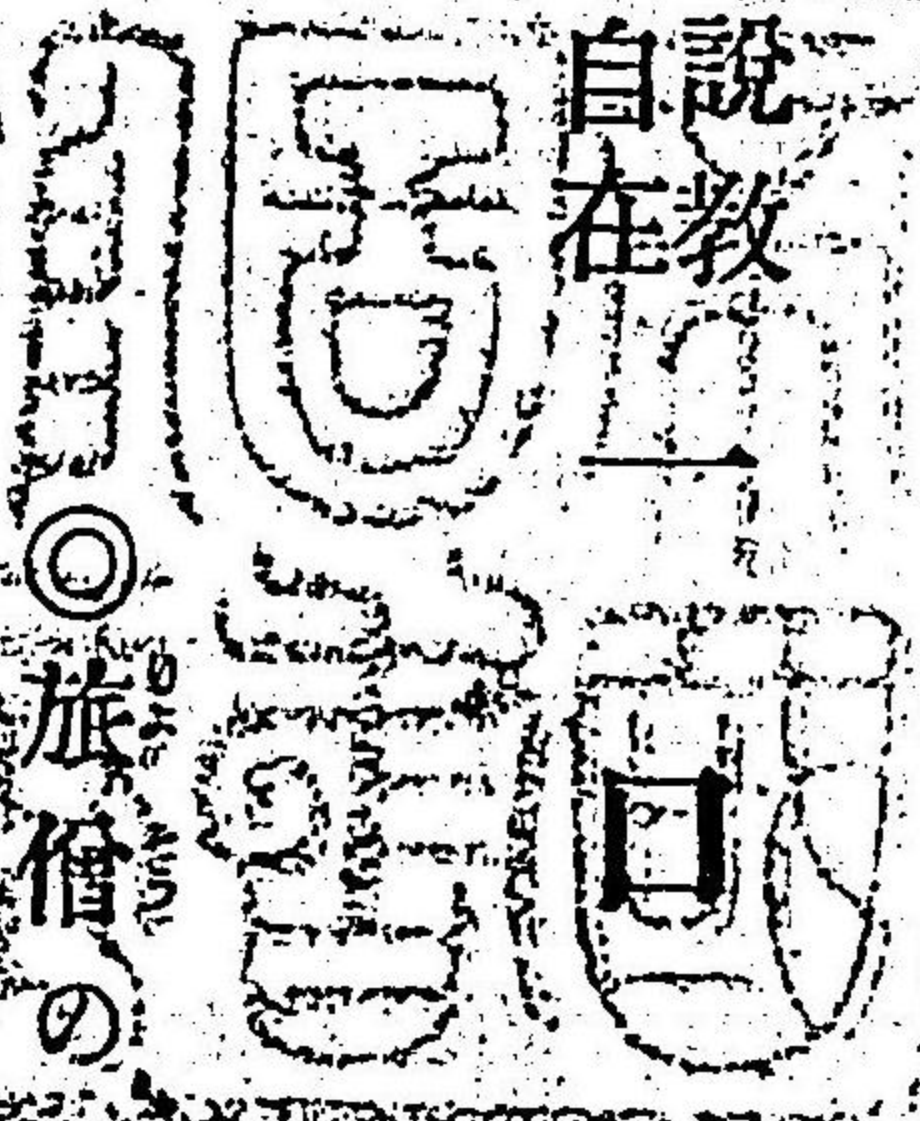
第十	第九	第八	第七	第六	第五	第四	第三	第二	第一
鶴の巢籠	信得た印	女郎花	推茸の化物	父母に生寫	南郭先生	信稱	鳥の雌雄	荒磯の月	旌僧の西明寺



廿四 廿三 廿一 十八 十六 十四 十一 九 七 頁

第十一	老翁の乳飲	廿六
第十二	百即百生	卅六
第十三	泉と鶏	卅八
第十四	庄松	四十
第十五	丸他力	四十二
第十六	賊縛の比丘鵜珠の沙門	四十七
第十七	囚人	五十二
第十八	念佛の稱へ心	五十八
第十九	誓願寺の紅葉	六十二
第二十	牛盗人	六十四

説教
自在



◎旅僧の西明寺

辯

第一編

除 饗 男 文 福 齋

天下の政治の模様を視ようとして、供をも連れず唯一人、旅僧の西明寺と名乗りて、諸國を行脚なされたが、下野の佐野と云ふ所まで行き給ふと、大雪に出逢ひ行きも戻りも出来ず、行路に一ツの小屋がある、其處に行きて、我れば旅僧て御座るか、始めての

道中に、此の大雪に出逢ひ、道は分らず、踐み迷ひ、殊の外の外の難義、何卒何卒今宵一夜の宿を貰ひ度し、と申されたれば、若き女女が立出て、夫夫はマア誠に御機之毒、御宿申し度きは山々なれとも、何分唯今夫が留主留主て御座るゆゑ、夫の留主に、御出家たりとも男男を泊めたと申しましては、妾妾の操操ほか立ませぬから、御断り申します、との立派な口上、西明寺の時頼公時頼公も、無據無據、雪ふる空に、笠をかむり、杖を力力に出出て行き給ひた、暫くすると、夫の佐野源左衛門佐野源左衛門が、歸られた、見れば、雪の中に足跡足跡があるから

誰を見られたか、と問へば、ハイ唯今旅僧が、御出て、泊めて呉れよと、申されましたなれと、彼尊尊か、御留主留主ゆへ、御断り申しましたと云へば、夫夫れは定めて、難義難義てあらう、袖袖ふり合ふも多生の縁縁、マシテ御出家の御宿、マタ遠くは行くまひ、トリヤ追追かけてと、足跡足跡しるへに、道の一丁半一丁半も行くと、遙向遙向ふに、旅僧旅僧が雪道に踐み迷ひ、難義の模様模様が見ゆる、ソユテ源左衛門、大音上げて、オホフ旅の御僧、オホフ旅の御僧、御宿申さう、の聲声が聞へるなり、一呼一呼ふ聲声が便便りなりけり旅の空雪空雪ふらはふれ

風吹かばふけ」と立歸つて、一夜の宿を借つたが、
旅僧の方から、泊めて呉れと、イツタ初めの頼みは
運心たのみ、押掛たのみ、チヤテ心配がある、今
ま源左衛門の方から、泊めてやらうの、一言聞くな
り、呼ぶ聲が便りなりけり、の頼みは、他力の頼み
、大悲の御心の、知れぬ中は、頼て見ても、何とな
う、信して見ても、機乗がある、今は、三界流浪の
長旅に、生死長夜の、日は暮れかゝる、八萬四千の
煩惱の雪はふりつもる、案し煩ふ其の矢先きに、御
手を擧ては招きつめ、御心にては思ひつめ、御口て

は御喚ひ通ふしの、三業揃ふた喚ひ聲が聞へるなり
、助け給へと、大悲にふり向く思ひより、外にはあ
るまい、然るに西明寺の時頼公が、佐野源左衛門常
世の宅に、危相の變應て、一夜を明かされた、其後
、鎌倉の一亂の時、源左衛門、御味方申さんと、出
陣せらるゝと、天下の執權職たる時頼公は、遙か上
段より、佐野源左衛門、久し振りちやナウと云はれ
た、振り仰ぎ見れば、過ぎし年、宿とめした旅僧、
サテハ時頼公であつたるか、夫れと知つたら、御饗
應の仕様もありしものごと、後悔せられたること

寺に参つて、御禮の粗末なは、恒日頃、内の御内
佛の、御給仕の粗相なからじや、内に居るとき孝行
な子は、養子に入つても、養父母に孝行な、内に居
るとき兄弟中のよい者は、嫁入しても、姉妹中よく
内から嗜を付て行かぬはならぬ、朝夕の御給仕の
丁寧な同行は、寺に参つても丁寧な、極樂に参つ
て正身の如來を拜んで見たれば、矢張、御内佛て、
五十年來御給仕申した、如來サマにかわりはない、
其時、胸に手を置いて、斯くと知つたら、モ少しは
御敬ひの、仕方もありしものごと、後悔せぬよう

今の中に、モソツと御敬ひをするかよいそへ
◎荒磯の月

一夜もすから岩にくたけてちる月を丸めてかへる沖
の白浪、明月や海一杯の月夜哉、まん丸るな十五
夜のお月様か、海一杯に、影をほそめて宿て御座る
と、風の爲めに、波を起し、千波萬波と打上る波に
つれ、荒磯の岩に打當てられ、御月さまも、碎けて
仕舞たか、アラ機之毒やと思ふたら、丸るめてかへ
る沖の白浪、また引浪に、静まつたら、もとの通り
の、まん丸るの御月さまちや、如來御回向の信心か

我々の胸の中に、まん丸ると、影を宿して下たさ
れたものを、浮世の縁にふれて、煩惱の浪荒く、男
浪女浪か打上ると、信心の月影を打碎ひたか、アラ
笑止やと、思ふたりヤ、一念に引戻すとき、丸るめ
てかへる沖の白浪、往生の一段には、少しも疑はな
い程に、三毒の煩惱はしばらく起れとも、まことの
信心はかれにもさへられず、と心得たれば、雨ふら
はふれ、風ふかばふけ、柳は緑なり、花は紅なり、
垣根に纏ふ、こほれ種の朝顔は、ゆかみなりに花
か咲く、そのおさまく、世渡りの中から、御恩の

程を喜ふ可し

◎鳥の雌雄

善知識の能と云は、阿彌陀佛に、歸命せよと云へる
使ひなり、とありて、忝なくも極樂淨土から、阿彌
陀如來の御使ひに、御出ましなされ、我等を導き給
ふとある、佛事や、變應に、喚はれたら、忙はしく
とも、行てあらうに、善知識の御喚使ひに預かつて
、尻が重ひとは何事そや、或書の中に、さまくの
鳥の差別をあけて、鶏の雉のと云鳥は、誰れか見て
も、雌と雄とは知れ易ひか、鳶の鳥のと云鳥は、素

人か見ては、雌と雄とが知れにくひに、何を以て知
るそと云に、左の羽がいを下たにして、右の羽がい
と上に置く、必ず雌ちや、左の羽がいを上にして、
右の羽がいを下たに置く、必ず雄ちやと云つてある
、今も其の如く、眼には大悲の御姿を拜み、耳には
殊勝の法を聞き、肩衣かけて珠數つまくり、無上寶
珠の南無阿彌陀佛を、稱へ喜ふ、有様を見れば、何
れも劣らぬ信者なれども、見分け難き鳥の雌雄も、
其道々て見る如く、佛祖善知識は、我等が胸の中を
能々御存知ある程に、後ろ冥ひ心を以て、お目を

くらます、事はてきぬゆへよく、慎むべきなり

◎聞信稱

古歌に「梅か香を櫻の花に匂はせて柳に枝の咲せて
や見ん」とあつて、誠に梅と云ものは、花は卑しけ
れども、諸花に勝れて匂がよい「咲は匂ひにほへは
そこに梅の花と梅か香や盲目も杖の止めところ」匂
ひのよき爲め、盲目にまて愛せらるゝは、梅の花ち
や、又櫻は、匂ひはなけれとも、花は諸花に勝れて
面白く、我邦民は、櫻花國の民杯と云つて、殊に櫻
の花を愛す、また柳は、花はいやくて、無きか如

くなれとも、木付はたほやかにして勝れたり、此等は、花と香と木付と、一徳つゝはあれとも、餘の徳も欠てあつて、残り多ひ、若し浮世か、思ふまゝにならば、梅の香を櫻に持たせ、柳の枝に咲せたら、花も香も木付も、三つなから、満足するてあらう、今も其の如く、世間に法を聞く人は多ひけれとも、信する人希れなり、また信する人はあれとも、行する人希れなりとある、此等は、聞の徳はあれとも、信の徳は欠け、信の徳はあれとも、行の徳はない、斯の如く、一徳ありて、餘徳なければ、往生浄土の

爲めにはならぬ、彌陀の御慈悲か、聞信稱の三つなれば、得られた我等も、聞信稱の三つてなければならぬ、聞かあつても、信か欠けては、片跛、信かあつても、行か欠けては、片跛、誠に綺麗な娘ちや、眼元口元、鼻筋から、色艶まで、之なら悴も苦情は云ふまいと、喜んだ甲斐もなく、立た姿を見たら、片跛であつたと云話がある、吾祖は、信心ありとも、名號をとなくは、詮なく候、亦一向に名號を稱ふとも、信心淺くは往生しかたう候元祖は、三信すてに具すれば、行として成せずと云ことなし

◎南郭先生

長明老人の書に、殊勝をつくること、血で血を洗ふ如く、後の血は落ち難しとあり、斯く皆サシか、佛前にあつて、恭敬合掌念佛するは、如何にも、殊勝らしく見ゆれども、外儀計り繕ひ、内心に信心なきときは、何の所詮もなきことなり、昔齊の宣王は、等を吹かせて、聞くことを好み給ふ（等とは吹き名の隨の時に作る樂器で笙の類ひなり）夫故に、三百人の吹人あつて、其中に、南郭先生と云者あり、曾て等を吹くことを知らぬとも、三百人の中

にまきれて、祿を食み、既に幾年をか経たりけるか、後に文王即位し給ひて、一人つゝ召し出して、等を聞き給ふ時に及んで、南郭先生、固よりエ、吹かぬものから、居るに居られず、夜逃して仕舞つた、此の南郭先生、始め宣王の時には、三百人一緒に吹きしゆへ自由にまきらかしをやつて居たれと、文王の御代となつて、一人つゝ召し出さるゝに至つては、なかくまきらかしはならぬゆへ、是非なく、夜にまきれて、欠落せしは、さても恥かしきことならずや、今も其の如く、皆一同に念佛稱へて、喜ぶと

きは、南郭先生流の、まきらかしめてき様か、我や
さき人やさき、一人つゝ出て行くときは、まきらか
しては、通られぬゆへ、是非なく、地獄に欠落せぬ
はならぬ、故に蓮如上人は、信者にまきれてむなし
くなるを悲しく思ふと御嘆きなされた

◎父母に生寫

御本書に、光明は母なり、名號は父なり、光明は縁
なり、名號は因なり、光明名號の、因縁か和合して
信心の子を産み付て下たさるゝとある、其の光明
には、破闇の徳あり、名號には満願の徳あり、不了

佛智の、疑の闇を破つて下たさるゝか、光明の母の
働き、頼む一念の、信心を起さして下たさるゝか、
名號の母の働きなり、時に信心に、信する心とまこ
との心との、二義ありと云へばとて、信心か二つあ
ると云ことではない、陰は、アノ娘は、口元のやさ
しい處、眼元の冷しい處は、母親に生き寫し、また
鼻筋の通つた處、眉の切り上つた處は、父親に生き
寫し、夫れては、娘は二人かと云へば、さうてはな
い、父と母とに似てあつても、娘は一人、久遠劫よ
り、晴れ兼た、疑の晴れたのは、光明の母に生き寫

しに、似たと云もの、頼み兼た后生一つを、心置きなく、助け給へと、大悲の彌陀の、頼まれたは、名號の父に生き寫しに、似たと云もの、光明名號に、似てあつても、信心はタツタ一つ、當流は、晴る晴れぬの、世話やめて、太儀なからまた聞き、術ないなからまた聞き、重ねくして聞く中に、晴れ兼た、疑の闇も晴れ、頼み兼た、彌陀の頼まれたは、光明名號の、父と母との働きなり、

◎推茸の化物

去る所の下女が、推茸の水に浸してあるを見て、ヒ

ツくりして、御家さん、推茸が化物になつて居ます、今朝紙袋から出した時は、小さなもので御座りましたか、桶に入れて、水に浸して置きましたら僅に錢の丸さ程なのか、蝙蝠の羽根をひろげた様に、大きくなりました、あれは化物で御座ります、ア、我身もヒヨクナ人ではある、元推茸と云ものは、あの様に大きなものちや、夫れを干しかためてあるゆへ、錢程な形になつてあれとも、水に浸して置くと、縮たのかのひて、大きくなる、元の形を知らぬからちやと云はれた、今南無阿彌陀佛の六字も、其の如く、

發願回向と、我等が胸の中の、煩惱妄念の、水に浸ると、即ち菩提の因となり、諸善萬行恒沙の功德と、大きうなつて、眼にこぼれては、歡喜の涙となり、口にこぼれては、御禮報謝の稱名となり、「こぼれては根を養ふや草の露」手足にこぼれては、參り恭敬の運ひをして、御苦勞大悲の御姿を拜み、淨土參りの、願ともなれば、行ともなつて、下たさるゝか、南無阿彌陀佛の六字なり、ナント難有こととはないか、僅の六字が、なせ其様に、大きうなることかと、不審に思ふたりや、兆載永劫と云、永い間干し

かためて、大きな功德も善根も、小さうタ、ムテ爺婆々の、胸の中に、令諸衆生功德成就と、回向して頂く、南無阿彌陀佛なり、

◎ 女郎花

今は昔僧祇と云人、或日高野に登山せられけるに、一人の老僧、女郎花と云、草花を手につけてありしを、僧祇其の花は、何と云花ぞと問はれしに、之は女郎花なりと答へられた、ソコテ僧祇も女郎花とは知りつれと、女人禁制の山なれば、ヨモヤ左様な花はあるまいと、思ふて問ふたと云つて、「よそに咲け

こゝは高野を女郎花」と詠しけるに、彼の老僧、夫
 れは誠に面白く出来た、ケント餘り無慈悲て、歌の
 情もない、余處に咲とは、ムユタラシイと云はれけ
 れば、僧祇夫れは如何さま、然らば、何と讀み申す
 へきやと、彼の老僧、不取敢一名を喚よ此處は高野
 そ女郎花」とは如何にと、兩人共に、誠に面白く能
 く出来たと、殊の外喜んだとある、之は兩人共、聖
 道門の意、今彌陀の本願は、五障の女人に、名を喚
 よ三従の女人に、姿たを變よの、無理は云はぬ、五
 逆の悪人か、聖者の貌して來るニヤ及はぬ五障の女

人か、菩薩の貌して來るニヤ及はぬ、女人の躰も女
 人の名も、其身其儘、置きながら、頼む計りて往生
 そと、信する計りて、光りを放つ佛けになるとは、
 何と勝れた、法てはあるまいか、

◎信得た印

衆生の方には、覺へばなけれとも、佛の方に、此の
 機をよくしろしめして、佛の心光、彼の一念歸命の
 行者を、攝取あそはさるゝなり、只我々の方は「秋
 來ぬと目にはさやかに見ぬねとも風の音にて驚かれ
 ぬ」と秋風の音にて、秋か來たと云ことか分る如

く、往生一定の報謝の稱名の、秋風の音にて、始めて、既に、信樂開發の、秋か來たりしことが分る、或人の、春か來たと云ことは、如何なることかと問ふた時、某歌人が「春來たるすかたは何處にそれ其處に庭の柳に風かそれ」と讀まれたけな、今も「信得たる印は何處にそれ其處に」といほしいの下たにそれ」とよるしく、辯すへし

◎鶴の巢籠

元祖和語燈錄に、阿彌陀如來極樂淨土を莊嚴したて、御眼を見めぐらしては我名を稱ふる人やあると御

覽し御耳を傾けては我名を稱ふる人やあると夜る晝るつねにきこしめさるゝなりされは一聲も一念も彌陀に知られまいらせすと云ことなしとあり、張合いのない、念佛ちやとは思はれな、ヨシ口の中て稱へても、聞きはずし給ふ彌陀てはない、聞き所て拜ても、見そこない給ふ彌陀てはない、彼の鶴の巢籠と云曲は、尺八にてよう、吹くものちやか、ヒヨコの鶴が、巢の中から、ツルウと鳴くと、雲井遙かに、親鶴が、ヒナ鶴の、聲に和して、鳴くと云こと、凡夫のヒヨコの鶴が、三毒煩惱の巢の中から、南無阿

彌陀佛と、稱ふるなり、其の聲に應して、雲井遙かに、大悲の親さま御喜ひちやとある、斯の如く、稱禮念の三業と、見聞知の三業と、一体になる所を、彼此三業不相捨離とは、釋し給へるものなり、

◎老翁の乳飲

今は昔道中の或る宿場に、東國邊の旅人が、行き仕れして、一步も動けぬ、可愛そうに思ふて、宿場はすれに、小屋をしつらい、入れて置きたか、段々病も重くなつて、兎ても本腹は、出來さうに見ぬ所から、村の者が更るく見舞ふてやつて、何を言

置くことばはないか、何なりと望みかあらは、叶へてやらうと、心切に尋ねてやれば、何にも外に望みと云は、御座らぬか、唯一つの願と云は、何卒息きのある中に、タツタ一口乳か飲んで死にたい、之計りが望みちやと云つて、涙を流して、頼むを聞て、村中の者は、大笑ひ、さても妙な望みもあればあるもの、小供かなんその様に、モウ七十近き老人か、死にしなに、乳か飲みたいとはヨツポト變な望みチヤノ、七十の手習と云ことは、聞いたか、七十の乳飲子と云は、今日か初耳ちや、併し易き望みちや、叶

へてやりたい、何處の嫁の乳も澤山な、隣の内儀
 此頃小供を死なして、乳かはりてこまると云つて居
 たも、彼れにも此れにも、頼ては見たか、乞食見た
 いな、きたない爺に、乳を吸はずことは嫌ぢやと、
 一人の云へは、口ちぐに、左様ぢやぐと、誰れ
 ありて、飲してやらうと言ひてかない、ソコテ其村
 の庄屋殿か、慈悲深き人て、内々乳母を呼て、頼て
 見ても乳の穢れぢや、内の御子達の御名までけぢす
 、そんなことは、ヨシ=なされと承知せぬ、シヨウ
 ことなしに、自分の女房に相談して、何も功德ぢや

、アノ爺も落ふれてこそをれ、乞食とも見ぬ、人
 か知れば色々口にかゝる、夜更けてひそかに飲し
 てやれと云へは、情けある人に、連れ添ふ女房、之
 も情け深きたちにて、快よく得心して、そんなら、
 今宵ひそかに、飲してやりましやうと、夫婦して、
 人の寢静まつた頃、裏口から、ソツトぬけ出て、さ
 て此中から、乳が一口飲み度いと頼み、飲して遣
 り度いと、色々心配して見たなれと、汝の望み
 は、易きことの六ヶ敷こと、誰れに云ても、得心し
 て、飲ましてやらうと、言ひてかない、詮方盡きて

私わたしが女房にようぼうを連れて来た、サア存分ぞんぶんに、たんなうす
 るまで、望のぞみを叶かなへて、心こころ置きなく、往生しやうじやうしやれと
 、心切しんせつな庄屋しやうやの言ことば、病人びやうじんは両眼りやうがんより、玉たまの様ようなる涙なみだ
 をこぼし、サモ嬉うれしさうに枕まくらをあけ、ヨシなき望のぞを
 致いたしまして、色々いろくと御心配ごしんぱいかけます上に、御内儀ごないぎ様さま
 の、お乳ちちまで、吞のましてやらうとの、御心切ごしんせつ、其その
 誠まことある、御心ごこころを見込みこんで、御願ごねがひ申まうし度たき、一義いっぎ
 御座ございます、乳ちちが吞のみ度たいと申まうしましたは
 、其そのの實じつ、慈悲じいある人ひとに、逢あひたい計はかりて御座ございま
 した、誠まこと御頼ごたのみ申度まうたきは、私わたしのタツタ一人ひとりの悴せがれめか

、京きやうに奉公ほうこうして居ゐます、其そのの悴せがれめに、此この金かねが遣やり
 度たい計はかりに、途々はろくと京上きやうじやうり、料はからすも、途ち中ちゆうにて此こ
 の病氣びやうき、這はふてなりとも、都みやこまで、悴せがれに金かねが渡わたした
 さ、飛立とびたつ様ように、思おもひますれと、此この病氣びやうきては、兎う
 ても叶かなはぬ、夫それちやと申まうして、心こころの知しれぬ御人ごひとに
 頼たのんでは、金かねが悴せがれの手許てのこに届いたくまひかと、案あんし
 た末すえに、老おいほれた此この爺おやが、乳ちちを吞のみ度たいと、望のぞみ
 ましたは、全まづくは、誠まことある人ひとに、逢あひたさ計はかりて御
 座ざりました、今いまは私わたしの思おもひが届いたき、彼尊あかたの様ような御方ごかた
 に逢あひましたは神佛かみぶつけの御引合ごひきあせ、何卒なにぞう此この金かねを、

京の悴に渡して下たされと、首に掛たる、五十兩の財布を差出せば、庄屋も大きに感心し、サテハ左様なことであつたか、其の義ならば、少しも心配さつしやるな、程遠からぬ京都のこと、早速届てやりませやう、併し私計りては、安心もてきまいからと、村内の老人、五人組を呼寄せて、病人の枕元に頭をならへ、悴の名前と、居所聞て、シツカリ財布を預りたれば、病人は大きに喜ひ、左様して下たさると、モウ金の悴の手許に届た様に存しますと、安心して、間もなく命ち終られたとある。佛告身子告苦一

切衆生也と、之は阿彌陀經の、付属の事と、善導大師が、御意なされた御言、大經は彌勒、觀經は阿難三經共に付属か、在つて、兆載永劫の修行は、阿彌陀の三字に攝れり、五劫思惟の名號は、五濁の我等に付属せり、此言は、善導大師の御言に、據せられて、觀經付属の意を顯し玉ふ、今の病人が、此の人こそ、誠ある人ちやと見込んだゆへ、五十兩の金を渡した、其の目指す所は、京に居る一人の悴ちや、付属と云ものは、大切なものちや、元祖聖人の、御弟子も、數々ある中に、御眞影と言ひ、選擇集御付属

なされたは、吾祖を除て外にはない、殊に御流罪、御出立の前日、小松谷の、御堂に於て、朝から人待ち貌に、御堂の椽に、出て御座つたか、七つ時分人目を忍て、吾祖聖人御暇乞に、御出なされたれば、元祖聖人も、嬉しげに、しみくと、御名残を、惜ませられ、御首に御掛なされた、後白川の法皇より、下たし賜はりし、浄土門弘通の詔勅を、御手すから、吾祖の御首に、掛させられ、是れ一つを渡したきに、朝から待ち兼たと、仰せられたとある一人多き人の中にも人そなき人となる人一人此一人

ならては、念佛爲本の、正意を傳へて呉れる人はあらしと、お撰ひなされたのちや、道理こそ、極樂界中よりの、御相談、其の砌りは、最負の襟に、思ふた人もあらふけれども、一天世界に比類なきは元祖の御目き、釋迦彌勒や阿難に、御付屬も、聞かする對機は、今時の凡夫、元祖の吾祖に、御付屬も、目指す相手は、末世の我人、旅人の五十両は、悴の手許に届た時か本望ちや、夫れも庄屋の心切があつたゆへ、釋迦彌陀二尊の、御實意を、我等に御届下たさるは、祖師善知識の、御慈悲なり、

◎百即百生

彌陀の本願は、悪人てさへアリヤ、誰れても助かる
 と云こととはない、女人てさへアリヤ、誰れても助
 かるると云譯てはない、悪人の中で、女人の中で、本
 願信して、御慈悲喜ぶ者ならば、必ず助けるとある
 、御本願ちや、ソユテ蓮如上人は、御文の中で、幾
 ケ所となく、十人は十人なから、百人は百人なから
 、十即十生百即百生と仰せられたか、之は、向ひ三
 軒両隣り、猫も杓子も犬の子も村中残らすと云こと
 てはない、彌陀を頼む者なら、十は十百は百、ヨツ

テ因願の若不生者のお誓は、三信十念の者へのお誓
 ひなり、故に十方微塵世界の念佛の衆生をみえなは
 し攝取してすてされは阿彌陀となつけたてまつると
 あつて、十方世界、皆な本願の相手なれとも、十方
 衆生の中で、念佛の衆生をみえなはしとある、此の
 みえなはしとは、觀の字、照觀の義、世間ではミソ
 コナウタと云ことかあるか、今阿彌陀如來か、信前
 の者を、ミソコナツテ光明の中に攝取するの、信後
 の者を、ミソコナツテ光明の外に置くと云様な、お
 みソユないはない、一念彌陀か、頼まれるなり、直

に光明の中に、攝取し給ふ、ソコを御文には、あや
またす助け玉ふとの給ひたり、

◎ 梟と鶏

或書の中に、梟と鶏とが、問答したと云ことか書て
あつたが、或時梟の鶏に、尋ぬるに、ソナタは不思
議な、タカヘス時をツクリヤルが、ナンソ心覺ても
あることかと、問ふたとき、鶏の返答に、イヤ別に
心覺いと云てもないか、時をツクル前には、有無に
足かあたゝまつて來るゆへ、獨りては、聲か出る
ことちやあ、ソナタは又夜る計りナキヤルが、あれ

には何ぞ心覺てもあることかと反問したれば、梟か
答に、イヤ別にユレそと云覺へはなけれと、星の出
るのを目あてに鳴くとイツた、ソコテ鶏が、重ねて
ソレならば、雨のふる夜杯の、星の見ぬ時は、何
ぞ目あてにせらるゝそと問ふた、梟此の問に、ゆき
つまつて、其の時はメツタ鳴きちや、と答へたとあ
る、自力の行者か其の如く、往生か定まつたやら、
定まらぬやら、譯も理屈もなしに、メツタ鳴きの、
南無阿彌陀佛か多ひか、他力往生の身の上は、鶏の
聲の出るか如く、如來の光明のあたゝまりか、行者

の身の中に、催して来た時、自から出る、南無阿彌陀佛なるかゆへに、稱名の返數に、目をかけやう筈はない、一念發起の立所に、正定聚の數に入給へば、其處か、往生治定の場所、其時の命のふれは自然に多念に及ぶの道理なり、

◎庄松

或同行の曰く、一心に彌陀如來を頼み奉り、朝夕念佛を稱へて喜んで居ます、是て往生は、云何てありましやうかと申せば、庄松曰く、刃ちやく、と鞘つかむ鞘は木ちやもの間に合ぬ、表て通りは難有か

善知識の教へを握り、阿彌陀如來の御實を、貫はんのではないかと申された、假令刃の鞘が立派ても、中の身がナマクラなら、命掛の勝負には間に合ぬ、ヨシ鞘は元、鞆は藤巻ても、カンシンの身が正宗なら、マサカの時には敵を亡す、信と行とは、鞘と身との如く、拔身の儘て、腰に指す者はない、必ず身を鞘にチサメて指す、然れとも肝心の勝負を決する時は、鞘ては切れぬ、淨土へ參るは信心一つなれとも、其の信心に添ふた、鞘の報謝は、命あらん限りは、喜はぬはならぬ、行く所を定めずして毎日歩

くとも、就くへき所なければ詮なし、之行はありあ
つて信なきが致す所、又行くへき所を思ひ定めたり
とて、道を歩せすしては、行きつくことあるまし、
之信あつて行なきが致す所なり、信行の二者、欠く
へからず、

◎丸他力

「なるまひものゝなるまひものゝ裸になるはオホサ
おほから竹の丸裸」大きな丸竹其の儘ては、鬼と云
へとも、裸ニヤ出来ぬか、五寸三寸に切り放ちて糸
を以てつなく時は、大きな丸竹も裸になる一なるま

ひものゝなるまひものゝ佛になるはオホサ彌陀願力
の丸他力「是から他力と云ことお話するから、大切
にきかつしやれ、かう云と皆さんば、ソリヤ他力と
云は阿彌陀如來の御力のことちやと、私の言ぬ先き
に、早合點して御座らうか、夫れては他力の味ひか
知れぬ、ナルホト他とお指しなされたは、まかう方
なき、阿彌陀如來のこと、力とは法藏因中の強願て
、如何なる苦を受るとも、悪人女人を助けニヤをか
ぬとある、若不生者の御誓の手強きことを力と云に
違ひはないか、唯サウ心得た計りては、堅魚節を丸

たりに、料理につかう様なもので、一向其の味い
 ない、今他力の二字を、祖師の御本書行卷の上から
 頂いて見ると、願力他力佛力他力と云ことも明して
 ある、願力他力と云は、因位に約して、他力を明し
 給ふ佛力他力と云は、果に約して他力を明し給ふ、
 他力の二字を因と果とに分て、因も他力果も他力、
 丸他力にて往生することとを明し給ふ、今因に約して
 他力を顯す、願力他力と云は、他力者如來之本願力
 也とあつて、佛の因位の昔、法藏因中の強願て、之
 も他力の根本ちやとよと、他力の本を知らせん爲め

に、願力他力と仰せられた、次に佛力他力と云は、
 果に約して、他力を顯すこととて、蓮如上人は一口に
 他力と云は彌陀を頼む事ちやと仰せられた、此度
 ひ彌陀の他力に助けられて、淨土にまひる我々は、
 助めるへき筈の我々ではない、助めるへき筈の者か、
 助めるのなら、眞實の他力ではない、他力とは生れ
 つきたる善惡を其の儘救ふすかたなりけり、助める
 へき縁も便りもない、我々が、何の造作も苦勞もな
 く、頼む一念て、助かる謂れか、丸他力なり、菩提
 は山の鹿招けとも來たらず煩惱は家の犬打てとも去

らす、夏の時分、幾千疋となく、群り遊ぶ螢は、幾
 等招ても来らず、イヤチヤと思ふ家の蚊は拂へとも
 去らず、團扇を放たず、随つて拂へは、随つて集る
 仕方もないて、手のたるい團扇を捨て、「ひたすら
 に他力貴し蚊屋の中、樂なものちや、胸のモヤクヤ
 、煩惱惡業の蚊は、幾等拂ふても、いやましに起る
 めら、「ひたすらに他力たうとし蚊家中、蚊家の中て
 は、蚊の鳴き聲へか苦にならぬ如く、他力本願の蚊
 家の中ては、煩惱妄念の、蚊の聲は苦にならぬ、一
 定往生の思ひにて、打喜ふ而已、

◎賊縛の比丘鵝珠の沙門

賊縛の比丘は王遊に草繫を脱し乞食の沙門は鵝珠を
 死後にあらはすその戒文を度々仰せられ候由に候御
 滅後に不思議をあらはさるへきの仰せに候之は蓮如
 上人御遷化前御病中の仰せ言にて、遺徳記にある通
 り、明應八年三月中旬、御弟子慶聞坊に對して仰せ
 られた御意で、始めに、賊縛の比丘は王遊に草繫を
 脱すとは、元馬鳴菩薩の、大莊嚴論にあつて、其因
 縁は二百五十戒の持戒の比丘達か、大勢連れ立て、
 廣き野中を過ぎ給ふに、あまたの盗人共に出逢ひ、

衣類持物は、悉くはき取られ、丸の裸にせられける
 か、流石に持戒の、比丘達のこととして、何の争ひも
 なされず、然るに若し此の比丘達が城下に行き、今
 日の始末の沙汰せなば、忽ち我々が難義になる之は
 モウイツソ殺して仕舞ふかよからうと評議したるに
 、其中一人あつて、イヤ此の比丘達は、敢て殺すに
 は及ばぬ、戒を持つた、比丘達の法として、野原の
 草木一本ても、ソサミ痛むることはならぬ、有合ふ
 草で繫き置けと、草モテ比丘達を繫き置き、皆逃去
 つて仕舞つた、一人の老比丘曰く、精神堅固に戒を

持つ者は人間の果報を得る、必ず破戒し給ふなど、
 皆一同身動きもせず座し居たるに、翌日其國の王狩
 に見ゆ、事の次第を問ひ給ひて、殊の外機毒に思
 召し、早速草繫を解ひて救ひ給ひた、是か賊縛の比
 丘の因縁なり、次に乞食の沙門は鵝珠を死后にあら
 はすとば、之も大莊嚴論に在て、昔一人の沙門か、
 乞食せられてあるか、或る玉摺の家に食を乞ひ給ふ
 に、玉摺は沙門に物進せんと思ふてか奥に入れり、
 摺り掛けの玉を見るに、其色赤色にして魚肉を見る
 か如く、然るに其處に、一疋の鵝か居て、肉類と見

て、摺掛の玉を一呑に吞て仕舞つた、程なう玉摺
出て來りて、大切な摺掛の玉の見ぬに、大きに驚
き、アノ玉紛失なす時は、國王に申譯なし、之は定
めて乞食の沙門が盗たに相違あるまひと、嚴敷吟味
せらるゝ時、沙門心の中に思ふには、若し有の儘を
告げなば鵜は忽ち殺さるゝてあらう、夫れては戒を
破るの道理、ヨシ我は殺さるゝとも戒は破るまし、
我今鵜の爲めに死するとも、來世は必ず解脱すへし
と、一向に其實を告げず、いよく沙門が盗たに相
違なしとして、頭手足の嫌なく、打叩き、沙門の目口

から、血が流れ出た、夫れを又餓が見て、其の血を
すゝる時、ア、面倒なと一打に打殺した、其時今の
沙門大きに悲しみ、汝が一命助けん爲めに、かゝる
難義に逢ふも厭はず忍ひ居たに、今は全く水の泡と
なつたるが、と殊の外歎き給ひて、有し次第を告げ
給ふに、玉摺忽ち餓の腹を立割り見るに、果して玉
が入てあつた、玉摺は打驚き、沙門の前に身を投て
懺悔せられたと云こと、時に蓮如上人何故に右の因
縁二句の戒文を度々仰せられたと云も、賊縛の比
丘は、王遊によつて誠が顯れ、乞食の沙門は餓の死

后に誠まことが顯あらはれた、蓮れん如にょ上人じやうじんは其御本地そのごほんぢは阿彌陀あみだ如來にょらい、或あるは祖師そしの御再誕ごさいだんとも云いへと、生涯しやうがい御本地ごほんぢを隠かくして、常つねの凡夫ぼんぷて御座ござたか、滅后めつごに色々の奇瑞きぎを顯あらはし、全く凡人ぼんじんならぬ趣おもひきを、御病中ごびやうぢゆうに、戒文かいもんを引ひて度々たびたび仰おほせられたるものならん、

◎囚人

因緣經いんげんきやうの中に善人ぜんじん樂死らくし囚しう如出獄しよにょしやく惡人あくじん怖死おそし囚しよ如入獄しよにょにやくと説といて善人ぜんじんの死しを樂たのしむ状態じやうたいは、罪人ざいじんの牢らうより出でるか如ごとく、惡人あくじんの死しを怖おそるゝ有様ありさまは、罪人ざいじんの牢らうに入るいるか如ごとしと、我々われわれは惡人あくじんに違ちがひない、何程なにほどの大病たいびやうを煩わづらふ

て居ゐても追付死おいつしなうかと思おもへば、喜よろこふ心こころは起おこらぬ、法然ほつぜん聖人せいじんは病患びやうげんを得えて偏ひとへに之これを樂たのしむとこそ仰おほせられたり然しかれとも病患びやうげんを喜よろこぶ心こころ更に起おこらす恥はぢへし悲かなしむべきものかとは、蓮れん如にょ上人じやうじんの御歎ごなげき、蓮れん如にょ上人じやうじんは惡人あくじんではなげぬとも病患びやうげんを喜よろこぶ心こころは起おこらぬとある、之これ我等われらか心こころの有様ありさまを、其儘そのま打出うちだして、これなから往ゆ生なまが出來きるそと云い旨ねがを知らせ給たまふ思召おぼしめなり、然しかるに攝取しやくしよの二字にじに就ついて、攝取しやくしよとは迷まよう者ものを追おは元捕もととらふる心こころなりとあつて、噲たゞへは大勢おほいせの人ひとを殺ころし、放火はつしやまてした大罪人たいざいじんか、夜よの間に其處そのこゝを立たのいて、何國なんごくとも

なく影を隠して、其の身の罪を逃れようとしても、一度天の網に掛けられたれば、遅ひか早いの替りはあれと、遂に一度は事顯れ、其時斯くと警察に聞へ、透問もあらせず、大勢の警部巡查を指向けて、大事の囚人取逃すなど、夫々に手配りを定ゆ、所々を厳しく堅め、扱て囚人は、何處そと見れば、豫て隠れの一間に籠り、木楯を取つて刃を提げ、寄らは切らんと身構へして、傍を叱て立た有様、何ともすへき様なく見ゆける處に、サスカ御上の御威光にて、上意なる杭抵をするな、眞妙に繩に掛れと、口ち

く呼ばれば、思ひの外に、刃を捨て、ハット計りに手を廻はず、時得たりと取手の巡查、三寸繩に縛上げて、大勢取巻引立て行かば、いかにくモウ再ひ吾家へは還られぬ、今か夫れと同事、彼は罪ある絞首の罪人なり、此れは信を得たる念佛の行者、善と惡との裏表、容子は遙かに異りたれとも、併し譬喩一分なれば、茲を能々聽聞せられよ、御座の面々我人は、十惡五逆の大罪人、無明の夜の間に人知れず、眞如の城を欠落して、三界の浦場に逃げ隠れ、生死の旅屋に閉ち籠り、惡業を木楯にとり、邪

見憍慢の釵を提げ、慳貪放逸の身構へして、傍りを
 叱む眞恚の眼つきホシニく嫌なとも恐しいとも、
 言ふに言はれぬ兇猛、諸佛如來の御手に洩れ餘りた
 るあふれ者を、餘さず洩さず、救ひ給ふ大悲の彌陀
 、四十八願の捕手の役人、夫々に手繩を定めさせら
 れ、修諸功德の閑道へ行けば、夫れ十九の願を以て
 からめとれよ、自力回向の裏門へ逃れば、夫れ廿の
 願てからめとれよとある、御下知を受けて善知識は
 口ちぐに、本願招喚の勅命なるそ定散自力の手向
 ひするな、眞妙に他力不思議の繩に掛れと、聲々の

御教化ゆへに、今は我等も詮方なく、大悲の御威光
 に恐れつゝ、雜行雜修の刃を捨て、疑心自力の膝折
 て、兎にも角にも任せ奉る時機を見て、后れもと
 らぬ大慈大悲の阿彌陀如來、攝取の繩を掛させられ
 、彼は獄輿此れはまた、本願一實の御乗物、かき乗
 せられた身の上は、モウ再度迷の古郷に還ることば
 てきぬソユテ御文には如來の誓願を信して一念の疑
 心なきときは如何に地獄へ落んと思ふとも我はから
 いにて地獄へも落すして極樂へ參るへき身なるか故
 なりと、仰せられたり、

◎念佛の稱へ心

同し念佛を稱へても、他流と今家とは、稱へ心も違ふ、他流では生涯稱ふる念佛、一遍々々の稱名を、之れ往生の業、之れ往生の業と、行者の方から、往生の業にあてあうて、稱ふる念佛、當流では往生は信の一念に、佛の方より定め給ふゆへに、信後の稱名は、佛恩報謝と心得て稱ふる念佛、若し自身往生の業と、あてあうて稱ふる心あらは、定散自力の稱名と名けて嫌ひ給ふ、故に改邪鈔には、正定業たる稱名念佛を以て往生淨土の正因とはおらい募るすら

なほ以て凡夫自力の企なれば報土往生叶ふへからずとあつて、鎮西の心存助救口稱南無とは、雪と墨程の違ひあり、淨土見聞集の中には往生の定まる印には慶喜の心起るなり慶喜の心起る印には佛恩報謝の思ひありとある、然れとも當流も信後の稱名は報謝にして、正定業にあらずとはの給はぬ、一形の稱名は、信心の延ひ行く相たて、其の躰固より正定業の念佛なれとも、稱へ心は正定業と思ふて稱ふる念佛に非ず報謝の念佛なり、或人の曰く、自然と顯るゝ念佛は他力なり、申さうと思ふて稱ふる念佛は自力

なりと、是大なる誤なり、全体自力他力と云ことは
、心の中にこそあれ、稱へ様に自力他力はない、心
の中の安心か他力なれば、申さうと思ふて申した念
佛も他力なり、心の中の信心か自力なれば自然と顯
るゝ念佛も自力なり、元祖念佛に數を定めて稱へ給
ふは、數か肝要ではない、相續か肝要ちやと云こと
は、繪詞傳並に和語燈錄に出てあるなり唯居ては忘
れ勝ちになり、稱へんと思ふても、懈怠になり易き
凡夫故に、何か縁かなければ相續かてきぬ、數を縁
として念佛を相續せんとの思召から、數を取りて稱

へ給ふ、西佛坊か法然聖人の數を取り給ふ事と、若
しや自力の數に陥り給ふにはあらざるかと、御問ひ
の歌に「一日に七万遍の念佛は自力にやある他力に
やある」と申された時「一念に參る淨土と聞くから
は嬉しきのみ、數をとるなり」と御返歌なされたと
ある「然らば吾祖聖人は如何にと云に「我は唯御名
を稱ふる計りなり數は如來のしるしめすなり」又蓮
如様は如何と云に「念佛の數にはよらぬ信なれと信
には數の多き念佛」吾祖は口に世事を交へず、聲に
餘言を顯とす、専ら稱名斷ゆることなし、蓮師は聲

とそり給ふ間も念佛を止め給はず領に剃刀の疵断ゆることなかりきと一稱へてもまた稱へても忘るゝな
六字の外につとめなければ

◎誓願寺の紅葉

昔誓願寺の紅葉は、青葉雜りと云か名物であつた、
或年時の天皇様より、誓願寺の紅葉を御所望になつ
たことかある、スルト和尚は大きに喜ひ、紅葉の大
枝惜氣もなく切落し、青葉と云青葉を、残らすむし
つて、テリくとした葉計り附て、恭しく陛下へ差
上られたれば、夫れを御覽遊はされて、さてく之

は聞きしに似合ぬ面白からぬ紅葉の大枝、誓願寺の
紅葉は、青葉雜りが賞玩ちやに、青葉と云たら一葉
もなく、ケ様のものなら見る甲斐もなし、早速に指
返せよとありたれば、和尚も本意を失ひ大きに残念
かりて愧入たことかあるけな、今も十九廿の本願て
は、妄念の枯葉を探り、煩惱の青葉をちきるか本意
なれとも、第十八願の他力の名所ては、シカヤモカ
ヤの青葉雜り、妄念の枯葉の下から、煩惱の蜘蛛の
巢の中から、かゝる者と御助けとは、ヤレく嬉し
や難有やと喜はるゝか本願の本意に叶ふとある、彌

陀と頼んで御慈悲喜ふ人は、雨夜の月と同じ事、煩惱妄念の雲は晴れずとも、臨終一念の夕には浄土参りに間違ひはない、歌に「過去よりも未来に通ふ一休み雨降らはふれ、風吹かばふけ」

◎牛盗人

たとひ牛ぬす人とはいはるともモシは後世者モシは善人モシは佛法者とみゆるやうにふるまふへからすと御誠めなされた、之は變な事の御意ちや、外に御諭のなされ方たもあらうに、牛盗人とは呼はるともとは、テモ奇態な御教化かと思はれ様か、之には

古き因縁故事あり、彼の西行が奥州に下られた砌り或日日暮に及て、宿を取損じて難義せられたか、一軒の百姓家に這入て、一夜の宿を頼まれたれとも、亭主か宿を借さうと云はなんだ、ソユテ西行是非なく、其家の椽に寝られて、一夜を明されたか、折悪く其夜盗人か来て、其家の牛を盗ていつた、西行は見つて見ぬふりして、見逃してやつたか、夜が明くると、西行は其處を立て行かれた、所が其家の亭主朝起き出て、馬家に牛の居ぬのを見て大きに驚き、之はオホめた夕への坊主か盗たものであらう、サア

追駈よ程遠くは行くまひと、遂に西行に追付、オホ
 不旅僧コナタハマア坊主の身てありながら、盗む物
 もあらうに、牛を盗むとは何ふ云こと、サア何處に
 隠した、サア牛出せ牛出せ、ソコテ西行イヤ拙僧は
 決して牛は存せぬ知らぬと云へは、イヤ知らぬとは
 云はさぬ、夜か夜中椽に寝て居られたから、汝か盗
 たに相違はないと、有無を云はさず打擲するによつ
 て、西行餘りに堪へ兼、ヤレ待てナレハ決して牛杯
 盗む様な者ではない、拙者は西行と云つて、歌道修
 行にあるく者ちやと云へと、イヤく合點か行かぬ

、何の西行てあらう、サア牛出せ牛出せ、ソレとも
 眞の西行ならば、歌を一首讀て見やれ牛は十二支の
 中なれば、十二支の中で讀て見やれ誠の西行ならば
 、免してやらう、西行は莞爾と笑つて「午未申酉戌
 よ早く亥子牛寅ぬと卯きな辰巳に」と直に一首讀
 まれたれば、總々か納得したと云こと、之は日本て
 の一の故事、又天竺ては、離越尊者と云羅漢があつ
 て、山中に入て木の皮を剝き、其れを鍋の中て煮き
 、袈裟を染めて干して置た所か、牛を盗まれた者の
 眼には、干してある袈裟か、サナカラ牛の皮の様

見れた、彼の男疑ふて、鍋の中を見れば、木の皮の
 牛の肉の様に見ゆる、由て彼の男大に憤り、コナタ
 コソ牛盗人なりと云つて、引縛て公儀に連れて出た
 れは、公儀の制度により、右の羅漢は入牢申附られ
 た、都合十二年の間牢に居たか、其羅漢に五百人の
 弟子あり、其中の一人、師匠の羅漢か、獄中に在る
 ことを聞出し、公儀に出て、我師匠の儀は、大徳の
 羅漢にして、決して牛を盗む様な人にあらねは、再
 吟味を爲し速に出牢仰付らるへしと、色々申述て
 遂に出牢仰付られた、然るに役人衆より問はるゝ

には、羅漢聖者とも云はるゝ身、通力自在を得たる
 者か、十二ヶ年も何故に牢中に在りしやとの尋に、
 之は自身の宿業の顯はれて御座る、自身宿世の昔に
 於て、則ち自身か牛を盗まれたことか御座る、其時
 罪もなき辟支佛を疑ふて、コナタはオレか牛を盗た
 人ちやと云て、ヤタラに打擲し十二時間苦しめた
 か、其罪によつて、一旦三途に墮したるも、遂に三
 途を出るを得て、此度佛道修行する身とはなつたれ
 とも、昔しの宿業免かれ難く牛を盗まぬ自身か、牛
 盗人の悪名を受て、十二ヶ年の間牢中で苦しんた

は、答もなき辟支佛を十二時間責め苦しめた報て
 御座ると答へられたとある、之が天竺ての古事であ
 る、如斯離越尊者は牛盗人と呼ばれたれと一言の争ひ
 もなされず、十二年の間、牢中に苦しんだと云こ
 と、今もたとひ牛盗人とは云はるとも、佛法者后世
 者と見ゆるやうに、ふるまふべからずとの、御誠な
 り、

自説教 一口辯 第一編終

明治三十三年十一月廿三日印刷

同 年十一月廿七日發行

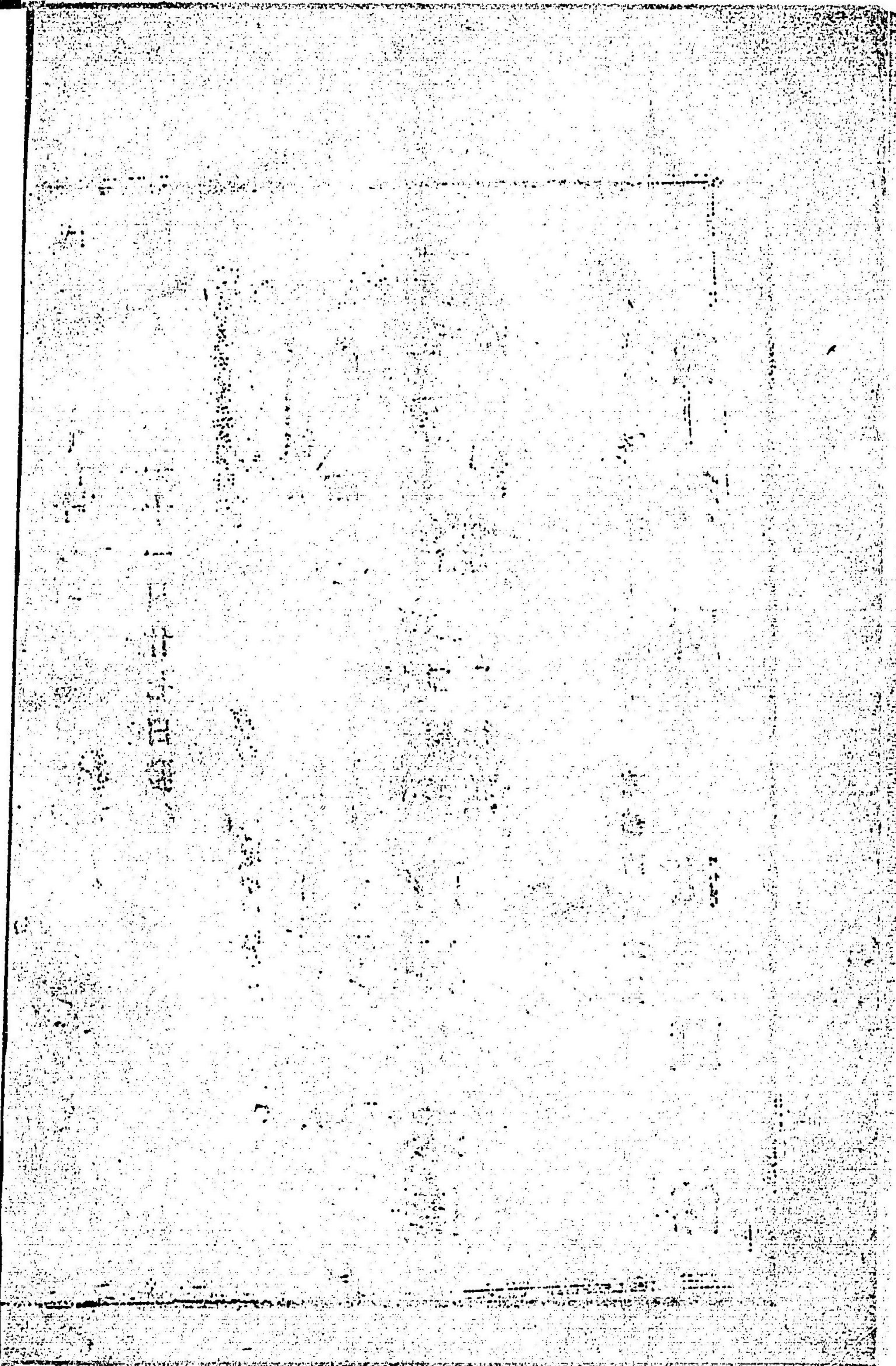


京都市下京區中珠敷屋町烏丸東入
 二十人講町二十二番戸

編輯 西村七兵衛
 印刷兼 發行 者

京都市東六條

發行所 法藏館



特21
929

説教自在
一口辨
西村七兵衛編
国立国会図書館

015946-000-5

特21-929

一口辨(説教自在) 第1編

文福斎/著

M33.11

ABC-1768

